

下河辺さんの思い出

都市化研究室理事 長多 長温

10月11日、帝国ホテル富士の間で、全国総合開発計画（全総）全てに携わった国土プランナー下河辺淳氏の追悼会が行われた。会場には、大勢の方々が参列され、氏の足跡を示すパネルが並べられ、改めて生前の幅広い活動ぶりが偲ばれた。筆者にとつての下河辺さんと言えば、国土審議会のそうそうたるメンバーの中央奥で会議を差配しておられ、傍聴者から見れば、まるで米粒のように見えた遠い存在であった。その後、下河辺さんと近しくお会いさせていただくようになったのは、胃の手術をされた直後の1993年頃からはなかったかと思う。それ以降、ご迷惑だったと思うがしばしば図々しく押しつけて薫陶を受けた。汲めども尽きぬような奥深さとスケールの大きなお考えにいつも驚かされたものである。

下河辺さんとの会話の中でいくつかが、記憶に残っている言葉をご紹介したいと思います。思う。「計画は常に破られる。そして、プランナーはいつも批判される。」社会は経済、文化、政治等、人間が予知できない様々な要素により変化するもので、これの予測を人間が行うことは極めて困難な作業であるというところで、稀代のプランナー下河辺さんの言だけに迫真性がある。

他方、「計画の成功・失敗は、後年の世代が行うこと。」とも、「国土計画は、国土を次の世代にいかに引き継ぐかだ。」とも仰っていた。

「開発は常に拠点開発だ。」第一次全総で新産業都市と工業整備特別地域合計二十一の地域が指定されたが、それでも開発は、均衡成長方式よりは、トリクルダウン効果を伴う拠点開発の考え方によるものをお考えであったと理解している。

国土計画の基本理念である「国土の均衡ある発展」について、「均衡と均等とは違う。均等は比較的単純に解を出すことができるけれども、『国土の均衡』は、永遠の課題だ。」国土計画は、人や工場等を国土に万遍なく配置するものではなく、経済構造、社会構造の変化に応じたその時々最適均衡状態を常に考えることで

あるという意味であろう。「（第三次全総の基本理念である）定住」というのは、定まったところに住むという意味ではない。人がどこにいても安定して暮らせるという意味だ。」定住自立圏構想も人の移動を制限するものではないという意味であろう。

国土形成計画で、「開発」より「整備」という言葉が使われていることに対し、「開発と成長を捨てた国の将来はどうなるか。」開発とは、壊すと同義ではなく（バブル経済崩壊後、そのように考えられていた面がある）、国土の更なる充実という意味であろう。

「一地域一文化。」地域は、文明系と生態系とが繋がりをみせて地域を形成している、それぞれの地域において、この文明系と生態系が接点を持っており、そこで地域毎の文化が形成されるという意味であろう。

国土計画という大きな舞台を議論する一方で、小さな漁村にでも気軽に行っておられ、司馬遼太郎氏とは極めて親しい関係で（風貌も似ておられた）、司馬遼太郎氏著「街道を行く」にも様々なアドバイスや、現地の方々の紹介をおやりになったのではないかと想像する。

1995年の阪神淡路大震災の復興委員会委員長をおやりになったが、2011年の東北震災後、余り人と会われなくなった。しかし、その間も、国土計画に関心を持つ若い官僚には最後まで会っておられたようである。

筆者が最後にお会いしたのは、2013年だったと思うが、その時に、「農業の衰退は経済問題であるが、農地の荒廃は国土問題である。」と仰ったことは鮮明に記憶している。現在農業改革が行われているが、それが農地、更には国土の整備に繋がることを期待する所以である。

とても書き切れないほどの言葉をいただいたが、筆者にとつて今は遺言に思える。「東京の都市計画家高山英華」（東秀紀著、鹿島出版会）や『都市計画家・石川栄耀—都市探求の軌跡』（中島直人他著、鹿島出版会）のように、いつか下河辺さんの業績を書いた本が出版されること望みたいものである。

特別寄稿